



大西水産有限会社代表取締役

ひかる

大西 光

南予水産研究センター副センター長

たかひろ

松原 孝博

愛媛大学大学院農学研究科 (大学院生)

ゆうき

森 優輝

愛媛大学南予水産研究センター設立から11年

特集 なんすいけん 南水研が描くあいなん水産業の未来

愛媛大学の水産研究・教育施設として、愛南町役場西海支所内に南予水産研究センター(通称：南水研)が設立されたのが2008年。2013年には町が整備したうみらいく愛南に南水研の新たな分室である西浦ステーションが開設。2018年3月末で設立から満10年を迎えました。この間、南水研では赤潮対策や魚病早期診断、スマの完全養殖技術の開発、ぎょしょく普及など、地域の課題を解決するための研究を推め、愛南町の水産業の発展に寄与してきました。この11年間を振り返り、これからの展望や課題などについて、教員、卒業生、学生それぞれの立場から話を伺いました。

「南水研に着任または進学した経緯を教えてください」

松原 北海道での研究に一区切りがついて、新しいことをしたいと考えていたときに南水研が教員を募集していました。自分が研究したことが現場で実践され、その出口まで見ることができる点に魅力を感じました。

大西 高校在学中に南水研の存在を知りました。自分が大学に入学する年に愛媛大学に水産養殖を研究するコースができ、地元で研究ができるのでこれは行くしかない。タイミングが良かったですね。

森 高校で先生から勧められたのがきっかけです。部活動で自然科学部に所属し、魚が音に反応する仕組みについて調べていました。当時、学校がキャリア教育に熱心で、関心があることを調べて発表する課題研究に力を入れていました。受験に際して南水研はAO入試だったので、そういった活動が活かせることも決め手となりました。

南予水産研究センターのあゆみ

2008年4月

船越に南水研（船越ステーション）設立。

2009年－2011年

都市エリア産学官連携促進事業を行う。

2012年～

スマの完全養殖の研究スタート。

2012年－2016年

地域イノベーション戦略支援プログラムを行う。

2013年4月

うみらいく愛南に西浦ステーション開設。

2017年

設立10年目を迎え、南水研の在り方検討会が設置され、12月に報告書がまとめられる。

2017年～

エコシステム形成プログラムに取り組む。

2018年3月

南水研設立10周年記念行事を開催。

松原 ^{たかひろ}孝博

南水研教授（西浦ステーション駐在）。水産学博士。1957年岐阜県生れ。中学・高校時代を静岡県で過ごし、大学進学を機に北海道へ。国立研究開発法人水産研究・教育機構の研究員を経て、2009年10月に南水研着任。2018年4月から副センター長。現在の主な研究課題は「養殖用新魚種スマの種苗生産・養殖技術の開発研究」。趣味は愛南町移住後に始めた海釣り、特にチヌ釣りに凝っている。

大西 ^{ひかる}光

大西水産有限会社代表取締役。1990年愛南町生れ。福浦中を卒業後、済美高（松山市）に進学し甲子園出場を目指すも断念。数学が得意であったため理系コースに移ったことが転機となり、南水研を志す。農学部海洋生産科学特別コース（海特コース）1期生として3年次から船越で研究に励む。卒業後は大阪の水産卸売会社勤務を経て、家業である真鯛養殖業を継ぐ。休日は1歳4か月になる愛娘の子守りに奮闘中。

森 ^{ゆうき}優輝

愛媛大学大学院農学研究科食料生産学専攻食料生産経営学コース在学（2019年3月末まで）。1994年島根県生れ。その後東温市（旧重信町）に移住し、済美高から南水研に進む。海特コース5期生としてアマゴやサツキマスを中心に研究し、卒業後は大学院に進学。この4月からは町内で就職し、今後もサツキマスプロジェクトに関わっていくことになっている。鮎釣りが趣味で、中四国の主な河川はほぼ巡っているほど。

松原 研究を通じて水産養殖にイノベーションを

大西 常に何かを試して良い真鯛を探求したい

森 サツキマスを愛南町から発信できる商材に

— 南水研で行われている研究の内容は

松原 西浦ではスマの完全養殖を主体に、サツキマスなど新養殖魚種の技術開発に取り組んでいます。船越では赤潮対策・魚病早期診断や水産生物の遺伝的多様性の研究が中心で、松山で社会科学系のぎょしょよく普及や水産物の流通などを研究しています。また、平成30年度から地域連携推進室を新設し、連携強化を図っています。

— 大西さん・森さんが取り組んでいた研究の内容は

大西 養殖真鯛の鮮度や色・弾力などを研究していました。色を数値化して、良い色の基準となる指標を作りたいと考えました。また、餌の配合の違いによる魚の成長度合いや、コストなども研究していました。

森 サツキマスの養殖です。自分南水研に来たときに、町内で行われていたアマゴ養殖をなぐん市場が継承し、地域の産



西浦ステーション。閉校した旧西浦小の校舎を活用した研究施設で、左側に見える飼育棟ではスマをはじめとする養殖用新魚種を大型水槽で飼育しています。施設のすぐ前には養殖漁場が広がり、フィールドワークを行うにはこのうえない環境。



一本松保育所園児に西浦ステーションの研究施設を案内し、説明する斎藤^{たいじゅう}大樹准教授。園児は普段見ることのない顕微鏡などに目を輝かせ、水槽を泳ぐ魚に歓声をあげていました。学生が施設見学に訪れることも多く、教職員が協力して対応しています。

業として残そうとしていました。町や漁協、南水研が連携して基礎研究を行い、さあこれからというところだったので、それを研究することに決めました。

―大西さんは南水研で学んだことを養殖の現場でどのように活かしていますか

大西 大学での研究で一時的なデータは得られますが、量が全然足りません。もっと長い年月をかけて調査し、より良い真鯛を育てようと取り組んでいきます。南水研と連携して今も研究・検証を続けています。

松原 南水研で研究する間に考え方や手法を学んでもらって、それをその後に活かしてもらえたらと思っています。特に大西さんや森さんの場合は、自分の職場ですと研究や技術開発ができますから。その中で、南水研はいつでも相談に乗れる、窓が開かれているということが重要であると考えています。

―南水研の課題は

松原 地域の課題は広範囲で、山積みの状態です。学生は増えていく方向ですので、教員、研究員ともども頑張っって着実に取り組んでいく必要があると感じています。

大西 南水研のことを知らない人も多いのではないのでしょうか。一般の方も南水研を目にする機会が増えて、問い合わせがくるようになれば、町全体でもっと面白いアイデアが出るかもしれない。そこがつかないら面白いのではと思います。

―後輩に伝えたいこと

大西 向上心を持って研究に取り組んでほしいです。これだけの現場がある環境はなかなかありません。僕はフィールドワークが好きでしたが、好きなことをやって、それを伸ばしていくてもらえたらと思います。

森 他の研究室の学生と話していると、「学生にそこまでやら



愛媛大学南予水産研究センター

- 船越ステーション TEL 0895-82-1022
教員・職員・研究員等 11名
学部生・大学院生等 8名
- 西浦ステーション TEL 0895-73-7112
教員・職員・研究員等 13名
学部生・大学院生等 10名
- 松山ステーション TEL 089-927-8145
(2019年3月末現在)



愛南漁業協同組合
販売促進部長

たかひろ
岡田 孝洋 さん

南水研のデータの裏付けが強みに

地元以南水研があることのメリットは、データに裏付けされた信頼が得られることです。たとえば、当組合が環境に優しい養殖業を支援する「養殖エコラベル(AEL)認証」を取得できたのも、南水研の研究成果であるデータによって関係者の信頼が得られたからだと考えています。スマなどの新魚種開発においても、南水研が基礎研究を行いバックアップしてくれるからこそ道筋ができるのです。南水研には面白い学生がたくさんいるので、そういった人材が愛南町に残れる環境を整備し、一緒に水産業を盛り上げていきたいですね。

せてくれないよね」と言われます。自分が思っていた以上に幅広くやらせてもらって、充実していたと思います。魚のことがかりやって、魚に助けられる人生です。目的に沿って行動すれば色々なことができる環境だからこそ、もの本質を見失わないようにしてほしいです。

— **これからの抱負を**

大西 南水研の卒業生として、それに恥じない成果を出して、自分の会社に還元することが地域の活性化につながるという形を目指したいです。養殖業者は常にステップアップしていかなければなりません。これからも美味しい真鯛を探求し、育てていきたいと考えています。

していききたいです。

— **南水研のこれからの方向性は**

松原 設立から10年の節目に、今後の在り方を検討する会が開かれて、方向性が議論されました。従来、散漫になっていた部分がある程度集約しようということなんです。しばらくは赤潮対策・魚病早期診断、養殖用新魚種開発、それからぎょしょく普及の三本柱でいきたいと思います。

— **南水研が描くあいなん水産業の未来**

松原 愛南町に一つの産業を作るといふところまでいけたらと考えています。将来的には地域に儲かる産業を生み出せたらと。南水研は愛南町にあつて、南予地域は日本の中でも養殖業が盛んなところなんです。地域に貢献するということは、日本の養殖業に貢献するということと同じだと考えています。研究を通じて水産養殖に革新技術を、つまりイノベーションを生み出していきたいですね。